

# 古代語の条件表現(1) 仮定条件「未然形+バ」

——『萬葉集』を資料として——

中 島 悦 子

## 1. はじめに

現代語の条件表現を担ういわゆる接続助詞には「ト」「バ」「タラ」「ナラ」などがあり、それぞれについての共時的な研究はすでに多くある。また、これらいわゆる条件の接続助詞がいつ発生し、どう変化したかなどの歴史的研究もすでにあり、これにはマクロなものとミクロなものがある。

例えば、阪倉（1958）は、古代から現在にいたる、もっともマクロな研究である。小林（1996）、峰谷（1977）は、中世から近世にかけての時間的にはマクロとミクロの中間的な射程を持つ研究である。中島（1989）（1990a）（1990b）は、さらに時間を絞り14世紀半ばの『覚一本平家物語』と16世紀末の『天草本平家物語』との比較によって、鎌倉時代と室町時代の条件表現の変化を調査したミクロな研究である。奥津・中島（1989）（1990a）（1990b）は、『捷解新語』の初刊本（1767年刊行）・改修本（1748年刊行）・重刊本（1781年刊行）の3本を比較した、中世末期から近世にかけての条件表現の変化を知るもっともミクロな研究である。いずれも古代語の仮定条件を表す「バ」から、中世末期に一般化したとされる「タラ（バ）」「ナラ（バ）」への発達過程に視点を向けた歴史的な変遷史ともいべき研究である。現代語の「ナラ」「タラ」はそのような歴史的変遷の結果なのである。

本稿はこれらの研究の延長線上にあるもので、条件表現が古代においてはどのような様相を示していたのか、中世から現代に連なる様相とどのように異なっていたのかを、『萬葉集』を資料として調査・分析する。資料とした『萬葉集』は、鎌倉末期書写の完本である西本願寺本を底本とする、補訂版『萬葉集』本文篇（塙書房 1963）および新編日本古典文学全集『萬葉集』（小学館 1996）を使用した。新編日本古典文学全集『萬葉集』の頭注と口語訳は小島憲之・木下正俊・東野治之によるものである。

いうまでもなく条件表現は古代からあったし、『萬葉集』を資料とした先学の研究も多数ある（例えば小路1988）。古代語における条件表現は、いわゆる条件の接続助詞「バ」によって明示される。本稿では、『萬葉集』全20巻4516首中に出現する、萬葉仮名「者」「婆」「波」「齒」「伐」「薄」「播」「之」等で表示されているいわゆる条件の接続助詞「バ」の用例を全て採取した。用例の採取方法は『萬葉集索引 古典索引刊行会編』（塙書房 2003）に従った。

条件表現の意味は、「バ」の上接語が未然形か已然形かによって異なる。例えば、松下（1928）は、条件表現を仮定条件と確定条件（「拘束格」と呼ぶ）とに分類し、さらに仮定条件を「未然仮

定」(完了・非完了)と「現然假定」に、確定条件を「必然確定」と「偶然確定」とに細分している。このうち「未然形+バ」は「未然假定」を表し、「已然形+バ」は「現然假定」「必然確定」「偶然確定」を表すとある。阪倉(1958)は、松下分類の「現然假定」を「恒常確定」として修正し、二つの事態の因果関係が超時間的・普遍的で、前件で示される条件のもとでは後件が常に生ずるといった関係を示すものであるとする。さらに渡辺(1974)は、松下の「現然假定」、阪倉の「恒常確定」を「一般条件」と規定し直し、先行叙述内容で示される条件のもとでは、後行叙述内容で示される帰結が常に生ずるという一般的な条件・帰結の関係を示すものであるとする。

以上の先学の研究を踏まえた上で、本稿では採取したいいわゆる条件の接続助詞「バ」の用例をもとに、条件表現の意味を次のように規定する。

#### 条件表現

##### ①假定条件

- (a) 假定条件
- (b) 反事实的假定条件

##### ②一般条件

##### ③既定条件

- (a) 原因・理由的条件
- (b) 事実的条件
  - (イ) 時間的狀況・近接的継起
  - (ロ) きっかけ
  - (ハ) 発見

- |  |     |      |
|--|-----|------|
| (1) 片岡のこの向つ峰に <u>椎蔭</u> かば(蔭者)今年の夏の陰にならむか                    | 巻7  | 1099 |
| (2) 出てて行く道 <u>知らませ</u> ば(知末世波)あらかじめ妹を留めむ関も置かましを              | 巻3  | 468  |
| (3) 父母を <u>見れば</u> (美礼婆)尊し妻子 <u>見れば</u> (美礼婆)めぐし愛し世の中はかくぞ道理… | 巻5  | 800  |
| (4) 生ける者遂にも死ぬるものに <u>あれば</u> (有者)この世なる間は楽しくをあらな              | 巻3  | 349  |
| (5) 住吉の里 <u>行きしか</u> ば(行之鹿齒)春花のいやめづらしき君に逢へるかも                | 巻10 | 1886 |
| (6) 石走る滝もとどろに鳴く蟬の声をし <u>聞けば</u> (伎気婆)都し思ほゆ                   | 巻15 | 3617 |
| (7) 物思ふと隠らひ居りて今日 <u>見れば</u> (見者)春日の山は色付きにけり                  | 巻10 | 2199 |

①假定条件のうち(a)の假定条件とは、例(1)のように前件の未実現の事態を未来に実現するものと假定し、後件の条件とするものである。(b)の反事实的假定条件とは、例(2)のように前件の事実に反することがらを假定し、後件の条件とする、いわゆる反実仮想といわれるものである。②一般条件とは、例(3)のように前件が起これば必ず後件が起こるものをいう。松下の「現然假定」、阪倉の「恒常確定」、渡辺の「一般条件」に当たる。③既定条件のうち、(a)原因・理由的条件とは、例(4)の

ように前件が後件の原因・理由となっているもので、松下、阪倉の「必然確定」、渡辺の「確定条件」に当たる。(b)事実的条件とは、前件と後件の既然の事実とを結び付けたもので、例(5)のように前件の事実と後件の事実が時間的に同時、或いは継起的に起こったりするもの、例(6)のように前件の事実が後件の事実のきっかけになっているもの、例(7)のように前件の事実が後件の事実を発見する条件となっているもの等をいう。松下、阪倉の「偶然確定」に当たる。以上のうち、①の仮定条件は「未然形+バ」によって表示され、②の一般条件と③の既定条件は「已然形+バ」によって表示される。

本来ならば『萬葉集』におけるすべての条件表現の意味を記述すべきだが、紙面の都合上、本稿では「未然形+バ」によって表される仮定条件のみを取り上げる。「已然形+バ」によって明示される一般条件と既定条件については次稿に回す。しかし、いわゆる条件の接続助詞「バ」（「未然形+バ」「已然形+バ」）全ての用例を採取したので、とりあえず表1にそれをまとめて挙げておく。なお、表中の数字は用例数を示す。また、本稿では仮定条件を表す「ズハ」「クハ」形式は取り上げていない。

表1にあるように、『萬葉集』全20巻4516首中に出現するいわゆる条件の接続助詞「バ」は、萬葉仮名で「者」と表記されているものが964例、「婆」が363例、「波」が47例、「齒」が6例、「伐」4例、「薄」2例、「播」1例、「之」3例と合計1390例採取された。参考までに小路（1988）では、「者」984例、「婆」330例、「波」79例、「齒」6例、「伐」4例、「薄」2例、「播」1例と合計1406例の「バ」が挙げられている。中島の採取した「バ」総数1390例中、「未然形+バ」は485例、34.9%（総数1390に対する比率）、「已然形+バ」は905例、65.1%ある。その内訳を見ると、「未然形+

表1 『萬葉集』の条件表現「未然形+バ」「已然形+バ」

	者	婆	波	齒	伐	薄	播	之	総計
未然形+バ									
①仮定条件	286	115	14	1	1			2	419
②反事実的假定	31	26	6		3				66
未然バ総計	317	141	20	1	4			2	485
已然形+バ									
①既定・事実的	393	107	8	3					511
②既定・原因理由									
既定(1)順接バ	158	65	10	2		1			236
ネバ	42	10	3						55
既定(2)逆接ネバ	18	4							22
既定(1)(2)	218	79	13	2		1			313
③一般条件	36	36	6			1	1	1	81
已然バ総計	647	222	27	5		2	1	1	905
未然バ+已然バ	964	363	47	6	4	2	1	3	1390

バ」485例中、仮定条件を表すものは419例、30.1%、反事実的仮定条件を表すものは66例、4.7%ある。他方、「已然形+バ」905例中、一般条件を表すものは81例、5.8%、既定条件824例、59.3%のうち原因・理由的条件（順接ネバ、逆接ネバも含む）が313例、22.5%、事実的条件が511例、36.8%ある。以上の数値から『萬葉集』においては、いわゆる条件の接続助詞「バ」は、「未然形+バ」(34.9%)より、「已然形+バ」(65.1%)という形の方が圧倒的に多いということがわかる。「已然形+バ」のうちでは、事実的条件(36.8%)が最も多い。原因・理由的条件(22.5%)がそれに続き、一般条件(5.8%)は非常に少ない。

通説によれば、既定条件はもともと次の例の、

(8) …ひさかたの天知らしぬれ（所知奴礼）こいまろびひづち泣けどもせむすべもなし

巻3 475

における「天知らしぬれ」（天におのほりになったので）のように、已然形それのみで表し得たといわれる。原始日本語は文と文との接続に未然形、連用形、已然形が用いられていて、接続助詞は存在しなかった（林巨樹 1959）という。また、『萬葉集』（岩波書店 日本古典文学大系）巻8 1443の頭注によると、「已然形は本来、そこできれずに既定条件を示して下につづく形で、その下にバが付属した場合には、…シタカラ、…シタノデの意味を表すことが多かった。ところがその用法がゆるむと、それが、…シタトキニ、…シタ場合ニという意味に近づいてくる。（中略）已然形+バという形は、…スルトという意味をも表すようになる。」とある。つまり、已然形それ自身で表し得た既定条件は、「バ」を承接する形即ち「已然形+バ」という形をとるようになると、「カラ／ノデ」という意味を表す原因・理由的条件だけでなく、「シタ場合ニ」「シタトキニ」「スルト」という意味を表す事実的条件をも表すようになるのである。

事実、『萬葉集』の調査結果を見ても、出現する「已然形+バ」は、もともと已然形それ自身に「カラ／ノデ」の意味が内在する原因・理由的な既定条件よりも、「シタトキニ」「スルト」を意味する事実的な既定条件のほうに多く用いられている。つまり、已然形に「バ」を後接するという形式で、前件の事実と後件の事実とを結び付けることが多くなって行ったと思われる。

ところで、本稿で取り上げる『萬葉集』中の仮定条件の出現率は事実的条件に次いで多い。次章ではこの仮定条件を表す「未然形+バ」を、「バ」の上接語による場合と後件のモダリティ形式による場合とに分けて見ていく。

## 2. 「未然形+バ」による仮定条件

### 2.1 上接語による仮定条件「未然形+バ」の分類

既に前章で述べたように、仮定条件は形態的には「未然形+バ」によって表され、総計485例ある。意味的には仮定条件と反事実的仮定条件とに2分類される。仮定条件を表す「未然形+バ」は419例ある。表1によると、それぞれの萬葉仮名で表示された「バ」の数値は「者」が286例、「婆」が115例、「波」が14例、「齒」が1例、「伐」が1例、「之」が2例となっている。

反事実的仮定条件は66例ある。表1では、「者」が31例、「婆」が26例、「波」が6例、「伐」が3

例となっている。

この章ではまず仮定条件を検討する。仮定条件419例を、「バ」に上接する語によって形態的に分類したものが表2である。なお、仮定条件は「未然形+バ」形式を対象とし、「ズハ」「クハ」形式は分析の対象からはずした。

上接語によって「未然形+バ」を形態的に分類すると、「V 未然バ」「V タラバ」「N ナラバ」「ト ナラバ」「V モノ ナラバ」「エバ」「セバ」「ナバ」「テバ」「ザラバ」「ナハバ」「カクシアラバ」にまとめられる。

簡単に説明すると、動詞未然形に接続する「バ」を「V 未然バ」とする。「タラバ」はいわゆる完了の助動詞「タリ」の未然形に「バ」のついたもので、動詞に接続する形を「V タラバ」とする。「ナラバ」はいわゆる断定の助動詞「ナリ」の未然形「ナラ」に「バ」の承接したものであり、「ナラバ」が名詞についた形を「N ナラバ」とする。「ナラバ」が「モノ」を介して動詞に接続する形を「V モノ ナラバ」とする。なお、動詞に直接する「V ナラバ」は『萬葉集』ではまだ出現していない。「ナラバ」が助詞「ト」に接続する形を「ト ナラバ」とする。助動詞の未然形に「バ」が承接する形には、「エバ」「セバ」「ナバ」「テバ」「ザラバ」「ナハバ」がある。その他、慣用句的な「カクシアラバ」がある。

この表2から、419例中300例、71.6%（総数419例に対する比率）と圧倒的な数値を示す「V 未然バ」が仮定条件を表示する代表的・典型的な形式であることがわかる。それに続くのが「助動詞 未然バ」である。「助動詞 未然バ」中では、完了の助動詞「ヌ」の未然形「ナ」に「バ」の承接した「ナバ」（70例、16.7%）と、完了の助動詞「ツ」の未然形「テ」に「バ」の承接した「テバ」（18例、4.3%）が多い。「V 未然バ」「助動詞 未然バ」を合わせると総数419例中400例、95.5%にも達する。つまり、古代語において仮定条件を表す最も典型的な形式は、動詞・助動詞の未然形に接続する「バ」（両者合わせて95.5%）であることが実証されている。

表2 上接語による仮定条件「未然形+バ」の分類

形 態	者	婆	波	齒	伐	之	計
V 未然バ	214	72	12		1	1	300
V タラバ	1	1					2
N ナラバ	10	3					13
ト ナラバ		1					1
V モノ ナラバ		1					1
エバ	3	1					4
セバ	2	3					5
ナバ	44	23	2			1	70
テバ	9	8		1			18
ザラバ	2						2
ナハバ		1					1
カクシアラバ	1	1					2
計	286	115	14	1	1	2	419

なお、現代語の「タラ（バ）」に通じる「V タラバ」は『萬葉集』においては2例、0.5%だけしか現れていない。完了假定条件を表す「V タラバ」が一般化したのは中世末期であり、さらにいえば、「バ」の脱落した「タラ」が一般化するのには近世中期以降である（中島1990a, 1990b）。従って、古代語においては完了假定条件を明示する形式は、「V タラバ」ではなく、「V 未然バ」「ナバ」「テバ」形式であったことが知られる。この『萬葉集』において優勢であった「V 未然バ」「ナバ」「テバ」は、鎌倉時代の『覚一本平家物語』では大幅に減少し、さらに室町末期の『天草本平家物語』になると「タ ナラバ」「タラバ」にとって代わられている（中島1990a）。

現代語において「ナラ（バ）」は、名詞のみならず補文にも直接するが、『萬葉集』においては、「ナラバ」総数15例中13例（3.1%）が名詞に直接する形式「N ナラバ」で出現している。補文に直接する「V ナラバ」は1例も出現していない。形式名詞「モノ」を介して動詞につながる「V モノ ナラバ」が1例、格助詞「ト」を承ける「ト ナラバ」が1例あるにすぎない。この「V モノ ナラバ」から移行したのが補文に直接する「V ナラバ」であるが、それが一般化するのには「V タラバ」と同様に中世末期である。「V 未然バ」も中世末期には「V ナラバ」にとって代わられている（中島1989）。

表2から、古代語においては、名詞に直接するのが「ナラバ」の本来の形式であったこと、「V ナラバ」への移行を示す「V モノ ナラバ」や「ト ナラバ」がそれぞれ1例ずつあったことが注目される。

以下にそれぞれの形式の用例を挙げて、分析する。なお、用例の読み下し本文と口語訳は『萬葉集』（新編日本古典文学全集 小学館）による。

#### ①「V 未然バ」

- |   |     |      |
|---|-----|------|
| (9) 夏影のつま屋の下に衣裁つ我妹裏設けて我がため裁たば（裁者）やや大に裁て | 巻7  | 1278 |
| (10) 奈良山をにははす黄葉手折り来て今夜かざしつ散らば（落者）散るとも   | 巻8  | 1588 |
| (11) 十月しぐれにあへるもみち葉の吹かば（吹者）散りなむ風のまにまに    | 巻8  | 1590 |
| (12) 白露を取らば（取者）消ぬべしいざ子ども露に競ひて萩の遊びせむ     | 巻10 | 2173 |

「V 未然バ」は形の上ではテンスレスであり、未完了假定の解釈も完了假定の解釈も可能である。例えば、(9)「裁たばやや大に裁て」（縫うのなら少し大き目に縫ってくれ）、(10)「散らば散るとも」（もし散るなら散ってもよい）のように、前件の前に後件が生じるという「前件←後件」の前後関係を示している。他方、(11)「もみち葉の吹かば散りなむ」（紅葉が吹けば散ってゆくだろう）、(12)「取らば消ぬべし」（取ったら消えよう）のように、前件の後で後件が生じるという「前件→後件」の前後関係をも示す。このように「V 未然バ」は双方向性を有し、未完了假定・完了假定の解釈を許す。

#### ②「V タラバ」



- (13) あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらば（開有者）いた恋ひめやも 巻8 1425  
 (14) 玉に貫く棟を家に植ゑたらば（宇恵多良婆）山ほととぎす離れず来むかも 巻17 3910

「V タラバ」は、例(13)「咲きたらばいた恋ひめやも」（咲いていたら、ひどく恋しくは思わないだろう）、(14)「植ゑたらば山ほととぎす離れず来むかも」（植えたなら、山ほととぎすは絶えず来るでしょうか）が示すように、前件が起こった後に後件が起こる「前件→後件」という前後関係を表す。「V タラバ」は一方方向性、即ち完了仮定の解釈のみを許すものである。なお、例(13)は補訂版『萬葉集』本文篇では（開有者）を「咲きたらば」としているが、小学館の新編日本古典文学全集『萬葉集』では（開有者）を「咲けらば」としている。本稿では補訂版『萬葉集』本文篇に従った。

### ③「N ナラバ」

- (15) 宇治人の喩ひの網代我ならば（吾在者）今は王良ましこつみ来ずとも 巻7 1137  
 (16) 闇ならば（闇夜有者）うべも来まさじ梅の花咲ける月夜に出でまさじとや 巻8 1452  
 (17) 我妹子に我が恋ふらくは水ならば（水有者）しがらみ越して行くべく思ほゆ 巻11 2709

「N ナラバ」は、「ナラバ」総数15例中13例を占めており、古代語においては、名詞を承ける「ナラバ」が典型的な形式であったことが実証される。

### ④「V モノ ナラバ」

- (18) 思ふ故に逢ふものならば（安布毛能奈良婆）しましくも妹が目離れて我居らめやも 巻15 3731

「ナラバ」が動詞に直接する「V ナラバ」はまだ出現していないが、例(18)「逢ふものならば」は、形式名詞「モノ」を介して「ナラバ」が動詞に接続する「V+モノ+ナラバ」の例である。中世に一般化し、現代語の「ナラ」に連なる「V ナラバ」はこの「V モノ ナラバ」からの移行と考えられる。

### ⑤「ト ナラバ」

- (19) …今のごと逢はむとならば（将相跡奈良婆）この櫛筥開くなゆめと… 巻9 1740

用例(19)「逢はむとならば」は、格助詞「ト」を介して用言に接続する「ト ナラバ」の例である。この「ト ナラバ」は中世においても、『覚一本平家物語』に1例、『天草本平家物語』に2例、『史記抄』に4例しか出現していない（中島1989）。

### ⑥「ナバ」

- (20) 玉かぎるほのかに見えて別れなば（別去者）もとなや恋ひむ逢ふ時までは 巻8 1526

- (21) 小墾田の板田の橋の壊れなば（壊者）桁より行かむな恋ひそ我妹 卷11 2644  
 (22) 潮干なば（之保非奈婆）またも我来むいざ行かむ沖つ潮さる高く立ち来ぬ 卷15 3710

### ⑦「テバ」

- (23) 信濃なる千曲の川の小石も君し踏みてば（布美豆婆）玉と拾はむ 卷14 3400  
 (24) 布勢の浦を行きてし見てば（由吉氏之見豆婆）ももしきの大宮人に語り継ぎてむ 卷18 4040

「ナバ」は完了の助動詞「ヌ」の未然形に「バ」のついた完了假定条件である。例(20)「別れなばもとなや恋ひむ」（別れてしまったらやたらに恋しく思うことだろうか）、(21)「板田の橋の壊れなば桁より行かむ」（板田の橋が壊れたら橋桁を渡ってでも逢いに行こう）、(22)「潮干なばまたもわれ来む」（潮が干たならば、またやってこよう）が示すように、前件が完了した後で後件が起こるといって、「前件→後件」の前後関係を表し、完了假定の解釈を許す。

「テバ」は用例(23)「君し踏みてば玉と拾はむ」（あなたがお踏みになったら、玉として拾いましょう）、(24)「布勢の浦を行きてし見てばももしきの大宮人に語り継ぎてむ」（布勢の浦を行って見たなら、大宮人に語り伝えましょう）が示すように、完了の助動詞「ツ」の未然形「テ」に「バ」のついた完了假定条件である。「テ」自体は前件の後に後件が完了する「前件→後件」という前後関係を表すにすぎない。「テ」に条件を表す「バ」が承接して、完了假定を表すのである。古代語においては「ナバ」「テバ」が完了假定条件として多用されている。

以下に挙げた例(25)の「エバ」は自発の助動詞「ユ」の未然形「エ」に「バ」の承接したもので、現在から未来にかけての假定を表す。例(26)の「セバ」は過去の助動詞「キ」の未然形「セ」に「バ」のついた形、例(27)の「ザラバ」は打消の助動詞「ズ」の未然形「ザラ」に「バ」がついた形、例(28)「ナハバ」は否定の助動詞「ナフ」の未然形「ナハ」に「バ」がついた形、例(29)「カクシアラバ」は「これなら」という意味を表す慣用的表現である。これらは出現数が少なく、用例だけを挙げておく。

- (25) 一日こそ人も待ち良き長き日をかくし待たえば（如此所待者）ありかつましじ 卷4 484  
 (26) 十月雨間も置かず降りにせば（零尔西者）いづれの里の宿か借らまし 卷12 3214  
 (27) そぎ板もち葺ける板目のあはざらば（不合相者）いかにせむとかわが寝そめけむ 卷11 2650  
 (28) 会津嶺の国をさ遠み逢はなはば（安波奈波婆）偲ひにせもと紐結ばさね 卷14 3426  
 (29) 我が欲りし雨は降り来ぬかくしあらば（可久之安良婆）言挙げずとも稔は栄えむ 卷18 4124

## 2.2 後件のモダリティ形式による假定条件「未然形+バ」の分類

假定条件419例を、後件に現れるモダリティ形式との呼応によって分類したものが表3である。

後件に現れるモダリティ形式によって「未然形+バ」を分類すると、「未然バ〜(ナ)(テ)ム」「未然バ〜メ(ヤ)(モ)」「未然バ〜ベシ」「未然バ〜命令」「未然バ〜 $\phi$ 」にまとめられる。簡単に説明



表3 後件のモダリティ形式による仮定条件「未然形+バ」の分類

モダリティ形式	者	婆	波	齒	伐	之	計
①バ～ム	131	48	8	1		2	190
～ナム	10	1					11
～テム	3						3
小計	144	49	8	1		2	204
②バ～メ	4	4					8
～メヤ	4	2					6
～メヤモ	19	7			1		27
小計	27	13			1		41
③バ～ベシ	20	5					25
④バ～動詞命令形	12	13					25
～ネ	5	4	2				11
～ナ		1					1
ナ～ソ (ネ)		2	2				4
～テヨ	1						1
小計	18	20	4				42
⑤バ～ $\phi$	35	18	1				54
～形容詞	22	8	1				31
～マシ (ヲ)	4						4
～マク	3						3
～マシジ	9	1					10
～ガネ	2	1					3
～ガニ	1						1
～ヤ	1						1
小計	77	28	2				107
総計	286	115	14	1	1	2	419

すると、「未然バ」が後件の推量の助動詞「ム」と呼応する形式を「未然バ～(ナ)(テ)ム」とする。推量の助動詞「ム」の已然形「メ」と呼応する形式を「未然バ～メ(ヤ)(モ)」とする。推量の助動詞「ベシ」と呼応する形式を「未然バ～ベシ」とする。後件の命令表現と呼応する形式を「未然バ～命令」とする。その他、後件に形容詞やモダリティ形式でないもの( $\phi$ 形式とする)等が来るものを一括して「未然バ～ $\phi$ 」とする。

表3によると、「未然バ～(ナ)(テ)ム」が204例、48.7%（総数419に対する比率）と過半数を占める。「未然バ～メ(ヤ)(モ)」が41例、9.8%、「未然バ～命令」が42例、10.0%、「未然バ～ベシ」が25例、6.0%と続く。つまり、後件に推量や命令等のモダリティ形式が来る「バ」が、総数419例中312例、74.5%にも上っている。この数値は、後件にモダリティ形式のない「未然バ～ $\phi$ 」(107例、25.5%)をはるかに上回るものとなっている。このことから、「未然形+バ」をとる仮定条件はその大部分が後件に推量や命令等のモダリティ形式を伴う、つまり、後件にはモダリティ制約が

ないということがいえる。なお、萬葉仮名それぞれについての数値は表3にまとめておいたので参照されたい。

現代語の条件表現における後件のモダリティ制約については、中島（1999）の調査によると、「タラ」と「ナラ」が制約がゆるく、「ト」が最も制約がきつい、「バ」はその中間に位置している。例えば、「タラ」は後件にモダリティ形式が来るものは書きことばで59%、話しことばでも57%、「ナラ」は書きことばで64%、話しことばで68%にもなっている。「バ」については、前件の述語が動作性の場合には後件にモダリティ形式が許容されず、非動作性であれば許容される。ただ、前件が動作性述語であっても後件に来るのが推量を表すモダリティ形式なら許容されている。現代語の「バ」は古代語の「未然形+バ」と異なり、後件にかなりのモダリティ制約を伴うのである。

以下に表3にまとめた①～⑤までの形式について、用例を挙げて分析する。

#### ①「未然バ～(ナ)(テ)ム」

(30) 我命しま幸く <u>あらば</u> （有者） <u>またも</u> 見む志賀の大江に寄する白波	巻3	288
(31) 磐代の浜松が枝を引き結びま幸く <u>あらば</u> （有者） <u>またかへりみむ</u>	巻2	141
(32) 兄らが <u>あらば</u> （有者）二人聞かむを沖つ渚に鳴くなる鶴の暁の声	巻6	1000
(33) 我妹子がやどのまがきを <u>見に行かば</u> （見ル往者） <u>けだし門より帰してむかも</u>	巻4	777
(34) <u>夕さらば</u> （暮去者）屋戸開け設けて我待たむ夢に相見に来むといふ人を	巻4	744
(35) こと <u>降らば</u> （落者）袖さへ濡れて通るべく <u>降らなむ</u> 雪の空に消につ	巻10	2317

この形式は、用例(30)～(35)に示されるように、前件の述語が非動作性でも動作性でも後件に推量・意志・願望を表すモダリティ形式「(ナ)(テ)ム」が来るものである。なお、「ナム」「テム」は完了の助動詞「ツ」「ヌ」の未然形に「ム」がついたものである。(30)(31)(32)は前件がともに「あらば（有者）」という非動作性述語であり、後件は(30)が推量の「見む」（見ることもあろう）、(31)が意志を表す「かへりみむ」（立ち帰って見よう）、(32)が願望を表す「聞かむ」（聞きたい）となっている。(33)(34)(35)では前件が「見に行かば」（見に行ったら）、「夕さらば」（夕方になったら）、「こと降らば」（どうせ降るなら）という動作性述語であり、後件はそれぞれ「帰してむかも」（追い返そうとなさるのではないのでしょうか）という推量を表す「テム」、「待たむ」（待とう）という意志を表す「ム」、「降らなむ」（降ってほしい）という希求を表す「ナム」をとり、意志、推量、願望のモダリティ表現が来ている。ただ、この「未然バ～(ナ)(テ)ム」は後件にモダリティ表現をとるといってもその大半は推量を表すもので、意志表現や願望表現は多くない。

#### ②「未然バ～メ(ヤ)(モ)」

(36) あらかじめ人言繁しくし <u>あらば</u> （有者）しゑや我が背子奥もいかに <u>あらめ</u>	巻4	659
(37) 凡ろかに我し <u>思はば</u> （念者）人妻にありといふ妹に恋ひつつ <u>あらめや</u>	巻12	2909
(38) なかなか絶ゆとし <u>言はば</u> （云者）かくばかり息の緒にして我恋ひ <u>めやも</u>	巻4	681

用例③⑥～③⑧を見ると、前件は非動作性述語「あらば」あるいは動作性述語「思はば」「言はば」である。後件は、③⑥「いかにあらめ」（どうなることでしょう）と推量の助動詞「ム」の已然形「メ」で終止するもの、③⑦「恋ひつつあらめや」（恋し続けましょうか）、③⑧「我恋ひめやも」（わたしは苦しい恋をしようか）と推量の反語「メヤ」「メヤモ」で終止するもの等である。「未然バ～メ（ヤ）（モ）」は前件に非動作性・動作性述語をとり、後件に推量または推量の反語を表すモダリティ形式をとるものである。

### ③「未然バ～ベシ」

- |                                      |     |      |
|--------------------------------------|-----|------|
| ③⑨ 都なる荒れたる家にひとり寝ば（宿者）旅にまさりて苦しかるべし    | 巻3  | 440  |
| ④⑩ かくのみし恋ひば（恋者）死ぬべみたらちねの母にも告げつ止まず通はせ | 巻11 | 2570 |
| ④⑪ ……露霜の消なば（消者）消ぬべく行く鳥の争ふはしに……       | 巻2  | 199  |

「未然バ」の後件に現れる「ベシ」は、推量・様態・命令の意を表す。例えば、③⑨の後件は「苦しかるべし」（つらいだろう）、④⑩は「死ぬべみ」（死にそうなので）、④⑪は「消ぬべく」（死ぬ）とあるように、いずれも後件に推量・様態・命令といったモダリティ表現を許すものとなっている。

### ④「未然バ～命令」

- |                                      |     |      |
|--------------------------------------|-----|------|
| ④⑫ 大船を漕ぎのまにまに岩に触れ覆らば（覆者）覆れ妹によりては     | 巻4  | 557  |
| ④⑬ には鳥の潜く池水心あらば（有者）君に我が恋ふる心示さね       | 巻4  | 725  |
| ④⑭ ……今のごと逢はむとならば（跡奈良婆）このくしげ開くなゆめと    | 巻9  | 1740 |
| ④⑮ 伊香保ろの沿ひの秦原ねもころに奥をなかねそまさかし良かば（余加婆） | 巻14 | 3410 |
| ④⑯ 恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽くてよ長くと思はば（念者）     | 巻4  | 661  |

「未然バ～命令」の前件は動作性述語あるいは非動作性述語である。後件は④⑫「覆れ」（転覆してしまえ）と動詞命令形のもの、④⑬「示さね」（お見せしておくれ）と誂え望む意味を表す助詞「ネ」で終止するもの、④⑭「開くな」（開けないでください）、④⑮「なかねそ」（思い悩まないでおくれよ）と、「ナ」「（ナ）～ソ」という禁止の終助詞が来るもの、④⑯「愛しき言尽くてよ」（やさしいことばを並べてください）と完了の助動詞「ツ」の命令形「テヨ」が来るもの等、いずれも命令を表すモダリティ形式が来ている。

### ⑤「未然バ～φ」

「未然バ～φ」とは、後件が例④⑰「いかに」のようにモダリティ形式でないもの、例④⑱「惜し」のように形容詞が来ているもの、例④⑲「借らまし」のように話し手の意志・ためらいを表す「マシ」で終止するもの、例⑤⑰「見まく」のように推量「ム」に体言的接尾語「ク」のついた「マク」が来るもの、例⑤⑱「ありかつましじ」、⑤⑲「来じ」のように否定推量「マシジ」「ジ」が来るもの。

例53) 54「着るがね」(お召しになるだろうから), 「消ぬがに」(消えてしまいそうに) のように詠えの助詞「ガネ」「ガニ」が来ているもの, その他例55のように疑問の助詞「ヤ」で終止するもの等である。後件は厳密に言えばさまざまなモダリティ表現或いはそれに準ずる表現のものもあるが, 「未然形+ば」と呼応する推量の「ム」「メ」「ベシ」や命令形等の典型的なモダリティ表現とは同一には扱いにくいので, ここに一括して分類しておいた。

以下に例文のみを挙げておく。

47) 大き海の波は恐し然れども神を祈りて船出せば (出為者) いかに	巻 7	1232
48) 手折らずて散りなば (落者) 惜しと我が思ひし秋の黄葉をかざしつるかも	巻 8	1581
49) 十月雨間もおかず降りにせば (零尔西者) いづれの里の宿か借らまし	巻12	3214
50) 生きてあらば (有者) 見まくも知らずなにしかも死なむよ妹と夢に見えつる	巻 4	581
51) 近くあれば見ねどもあるをいや遠に君がいまさば (伊座者) ありかつましじ	巻 4	610
52) 春雨に衣はいたく通らめや七日し降らば (零者) 七日来じとや	巻10	1917
53) 秋つ葉ににほへる衣我は着じ君に奉らば (奉者) 夜も着るがね	巻10	2304
54) 道に逢ひて笑まししからに降る雪の消なば (消者) 消ぬがに恋ふと言ふ我妹	巻 4	624
55) ……魂合はば (相者) 君来ますやと……	巻13	3276

## 2. 「未然形+バ」による反事実的仮定条件

### 2.1 反事実的仮定条件「未然形+バ」の分類

「未然形+バ」は後件のいわゆる反実仮定の助動詞「マシ」と呼応することによって, 事実と反対のことを仮定する条件を表す。これを反事実的仮定条件と呼ぶことにする。

この反事実的仮定を表す「未然形+バ」66例を, 前件「バ」の上接語と後件のモダリティ形式(「マシ」を典型とする)によって分類したものが表4である。

「未然形+バ」と呼応する形式は, 「未然バ〜マシ」4例, 「未然バ〜マシヲ」8例, 「未然バ〜マシモノヲ」4例, 「未然バ〜ム(モノ)(ヲ)」4例, 「未然バ〜φ」3例と計23例ある。「バ」に過去の助動詞「キ」の未然形「セ」が上接した「セバ」と呼応する形式には, 「セバ〜マシ」6例, 「セバ〜マシヲ」16例, 「セバ〜マシモノヲ」6例, 「セバ〜ム」1例, 「セバ〜φ」1例と計30例ある。反実仮定の助動詞「マシ」の未然形「マセ」に「バ」の上接した「マセバ」と呼応する形式には, 「マセバ〜マシ」4例, 「マセバ〜マシヲ」5例, 「マセバ〜マシモノヲ」3例, 「マセバ〜モノヲ」1例と計13例ある。以上のうち, 16例と最も用例数の多い「セバ〜マシヲ」が反事実的仮定条件を表す典型的な形式であるといえる。なお, 萬葉仮名のそれぞれの数値については表4を参照されたい。

以下に分類した(1)~(3)の形式について具体例を挙げ, 分析する。

#### (1) 「未然バ」と呼応する形式

表4 反事実的仮定条件「未然形+バ」の分類

	者	婆	波	伐	計
(1) バ～マシ	1	3			4
～マシヲ	8				8
～マシモノヲ	2	2			4
～ム(モノ)(ヲ)	4				4
～ $\phi$	3				3
(2) セバ～マシ	1	3	1	1	6
～マシヲ	6	7	1	2	16
～マシモノヲ		5	1		6
～ム	1				1
～ $\phi$		1			1
(3) マセバ～マシ	2		2		4
～マシヲ	1	3	1		5
～マシモノヲ	1	2			3
～モノヲ	1				1
計	31	26	6	3	66

## ①「未然バ～マシ」

- (56) 妻もあらば (有者) 摘みて食べまし沙弥の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや 巻2 221

## ②「未然バ～マシヲ」

- (57) 大橋の頭に家あらば (有者) ま悲しくひとり行く兒に宿賃さましを 巻9 1743  
 (58) 玉梓の道行かずしあらば (有者) ねもころのかかる恋にはあはざらましを 巻11 2393

## ③「未然バ～マシモノヲ」

- (59) 暇あらば (有者) なづさひ渡り向つ峰の桜の花も折らましものを 巻9 1750  
 (60) 我がやどに咲ける秋萩常にあらば (有者) 我が待つ人に見せましものを 巻10 2112

## ④「未然バ～ム(モノ)ヲ」

- (61) 玉ならば (有者) 手にも巻かむをうつせみの世の人なれば手に巻き難し 巻4 729

⑤「未然バ～ $\phi$ 」

- (62) 紅の花にしあらば (有者) 衣手に染め付け持ちて行くべく思ほゆ 巻11 2827

「未然バ」と呼応する形式は、例(56) (57) (58) (59) (60) (62)に見るように、前件が「アラバ」形をとるもの、つまり「アラバ～マシ(モノ)(ヲ)」形式が多い。例えば、「未然バ～マシ」の用例(56)「妻もあらば摘みて食べまし」は、前件で現実には妻は居合わせないがもし妻が居合わせたらと仮定し、その仮

定のもとに後件で摘んで食べめしと推量するものである。「未然バ〜マシヲ」の用例(58)「道行かずしあらば〜かかる恋にはあはざらましを」も実際はその道を行ったのだが、もし行かずにいたらと前件の反事実の仮定のもとに、後件でこんな苦しい恋には逢うまいものをと推量するものである。「未然バ〜マシモノヲ」の用例(59)「暇あらばなづきひ渡り向つ峰の桜の花も折らましものを」も前件で現実には暇がないがもし暇があったらと仮定し、後件で川を苦勞して渡って対岸の桜の花でも折ろうものをと推量している。このように「未然バ〜マシ(モノ)(ヲ)」は、前件で事実と反することがらを仮に想定し、その仮定のもとに後件で推量するものとなっている。

(2) 「セバ」と呼応する形式

① 「セバ〜マシ」

- (63) 旅にして物恋之鳴毛聞こえざりせば（不所聞有世者）恋ひて死なまし 卷1 67  
 (64) 遠妻し高にありせば（有世婆）知らずとも手綱の涙の尋ね来なまし 卷9 1746

② 「セバ〜マシヲ」

- (65) かく恋ひむものと知りせば（知者）夕置きて朝は消ぬる露ならましを 卷12 3038  
 (66) あしひきの山縵の兒今日行くと我に告げせば（告世婆）帰り来ましを 卷16 3789

③ 「セバ〜マシモノヲ」

- (67) 妹が家道近くありせば（安里世婆）見れど飽かぬ麻里布の浦を見せましものを 卷15 3635  
 (68) かからむとかねて知りせば（思理世婆）越の海の荒磯の波も見せましものを 卷17 3959

『萬葉集』の反事実的仮定条件では、この「セバ」と呼応する形式のうち、「セバ〜マシヲ」が16例と他の形式の3倍も多い。「セバ〜マシ」の用例(63)「聞えざりせば恋ひて死なまし」は、前件で現実には聞こえたのだが、もし聞こえなかったとしたらと事実と反することを仮定し、後件で恋い死んでいるであろうと推量するものである。「セバ〜マシヲ」の用例(65)「かく恋ひむものと知りせば〜朝は消ぬる露にあらましを」は前件でこんなに恋に苦しむものとは実際には知らなかったが、もし知っていたらと仮定し、後件で朝には消える露であったほうがましだという願望を表すものである。「セバ〜マシモノヲ」の用例(68)「かからむとかねて知りせば〜荒磯の波も見せましものを」は、前件でこうなるとかねて知っていたらと仮定し、後件で荒磯の波でも見せてやればよかったという後悔の気持ちを表明するものである。このように「セバ〜マシ(モノ)(ヲ)」の後件は単なる推量表現にとどまらず、願望や後悔等の話者の気持ちを明示するモダリティ表現となっている。

(3) 「マセバ」と呼応する形式

① 「マセバ〜マシ」

- (69) 我が背子と二人見ませば（見麻世波）いくばくかこの降る雪の嬉しからまし 卷8 1658



- (70) 恋するに死するものにあらませば (有者) 我が身は千度死に反らまし 巻11 2390

②「マセバ〜マシヲ」

- (71) 梓弓引きてゆるさずあらませば (有者) かかる恋には遇はざらましを 巻11 2505  
 (72) ぬばたまの夜渡る月にあらませば (安良麻世婆) 家なる妹に逢ひて来ましを 巻15 3671

③「マセバ〜マシモノヲ」

- (73) かくばかり恋ひむものそと知らませば (知者) その夜はゆたにあらましものを 巻12 2867  
 (74) 大船に妹乗るものにあらませば (安良麻勢婆) 羽ぐくみ持ちて行かましものを 巻15 3579

④「マセバ〜モノヲ」

- (75) かくばかり恋ひむものそと知らませば (知者) 遠くも見べくありけるものを 巻11 2372

「マセバ」と呼応する形式のうち、「マセバ〜マシ」は、例えば用例(69)のように、前件で「わが背子と二人見ませば」と現実には大君は居合わせないのだが、大君と二人で見るのだったらと仮定し、後件で「いくばくかこの降る雪の嬉しからまし」(どんなにかこの降る雪がうれしいでしょう)と話者の望みを述べている。後件が話者の願望だけでなく、後悔や残念な気持ちを表す例もある。例えば、「マセバ〜マシヲ」の用例(71)は、前件で「梓弓引きてゆるさずあらませば」(心を強く引き締め、しっかりしていたら)と仮定し、後件で「かかる恋には遇はざらましを」(こんな恋には遇うまいものを)と後悔の念を表明するものである。「マセバ〜マシモノヲ」の用例(74)も「大船に妹乗るものにあらませば」(大船に妹が乗ってもよいものであったなら)という前件に対して、後件では「羽ぐくみ持ちて行かましものを」(羽ぐくみ抱えて行きもしように)という残念な気持ちを表すものである。

こうして見ると、「未然形+バ」をとる反事実的仮定条件も後件では推量や願望あるいは後悔・残念な気持ちといった話し手の心的態度を表明するものとなっている。言い換えれば後件にはモダリティ表現が現れるといえる。

### 3. おわりに

『萬葉集』で採取した「未然形+バ」は、仮定条件を表すものが419例、反事実的仮定条件を表すものが66例とあるように、仮定条件に多用されている。特に動詞の未然形に接続する「V 未然バ」が300例と他を圧倒している。「V 未然バ」は形の上ではテンスレスで未完了仮定の解釈も完了仮定の解釈も許すところから、古代語において多用されたものと推測される。

現代語の「タラ」に通じる「V タラバ」は『萬葉集』においては2例しかない。古代語においては完了仮定を表す「V タラバ」は未発達だったといってよい。完了仮定を表すものとして、「V 未然バ」の他に「ナバ」「テバ」が用いられている。これら古代語において完了仮定に用いられた

「ナバ」「テバ」「V 未然バ」が、「タラバ」「タ ナラバ」にとって代わられたのが中世末期であり、「バ」が脱落した「タラ」として一般化したのは近世になってからである。現代語の「タラ」はこのような歴史的変遷を経てきたのである。

現代語の「ナラ」に通じる「ナラバ」は15例あるが、そのうち13例が「N ナラバ」の形式で出現している。「ナラバ」は名詞に直接するものが本来の形であったことが知られる。補文に直接する「V ナラバ」は1例もないが、「V モノ ナラバ」「ト ナラバ」は各1例ずつではあるが出現している。この「V モノ ナラバ」から移行したと考えられる「V ナラバ」が一般化したのもやはり中世末期であり、さらに近世になって「バ」の脱落した「ナラ」が一般化し、現代語に連なっていくのである。

假定条件の「未然形+バ」は後件に推量・意志・命令・様態・願望等を表すモダリティ形式（「ム」「メ」「ベシ」「命令形」「ネ」「ナ」「ソ」等）をとるものが419例中312例、74.5%と高い比率を示している。反事実的假定条件の「未然形+バ」も後件に推量・願望・後悔等を表すモダリティ形式（「マシ(モノ)(ヲ)」）をとっている。現代語の「バ」が後件に制約があるのと違って、古代語の「未然形+バ」は假定条件にしろ、反事実的假定条件にしろ、後件にはモダリティ制約がないということがいえよう。

#### 引用・参考文献

- 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 1963 補訂版『萬葉集』本文篇 塙書房  
 小島憲之・木下正俊・東野治之 1996 『萬葉集』新編日本古典文学全集 小学館  
 正宗敦夫編2003 『萬葉集索引』古典索引刊行会編 塙書房  
 高木市之助・五味智英・大野晋 1959 『萬葉集』日本古典文学大系 岩波書店  
 小林賢次 1996 『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房  
 小路一光 1988 『萬葉集助詞の研究』笠間書院  
 阪倉篤義 1958 「条件表現の変遷」『文章と表現』角川書店  
 1993 『日本語表現の流れ』岩波セミナーブックス45 岩波書店  
 奥津敬一郎・中島悦子 1989 「『捷解新語』の条件表現(一)「ナラバ」—初刊本・改修本・重刊本を比較して—」『国文目白』29号 日本女子大学国語国文学会  
 1990a 「『捷解新語』の条件表現(二)非「ナラバ」—初刊本・改修本・重刊本を比較して—」『国文目白』30号 日本女子大学国語国文学会  
 1990b 「『捷解新語』の条件表現(三)非「ナラバ」—初刊本・改修本・重刊本を比較して—」『日本女子大学紀要』40号  
 中島悦子 1989 「『平家物語』の「ならば」—覚一本と天草本を比較して—」『会誌』8号 日本女子大学大学院の会  
 1990a 「『平家物語』における「たらば」と「たならば」—覚一本と天草本を比較して—」『東海大学留学生教育センター紀要』10号  
 1990b 「『浮世床』の条件表現—「ナラバ」と「ナラ」、「タラバ」と「タラ」—」『会誌』9号 日本女子大学大学院の会  
 1999 「条件接続用法における「と」「ば」「たら」「なら」の使い分け—書きことばと話しことばの実態調査から—」『国士館短期大学紀要』24号 国士館短期大学人文学会

- 蜂谷清人 1977 「狂言古本における仮定条件表現「ならば」「たらば」とその周辺」『成蹊国文』10号  
 林 大 1955 「萬葉集の助詞」『萬葉集大成 6 言語篇』平凡社  
 林 巨樹 1959 「ば・とも・と の研究」『国文学 解釈と教材の研究』  
 松下大三郎 1928 『改選標準日本文法』紀元社。訂正版（1930）中文館。復刊（1970）勉誠社。  
 山口堯二 1980 『古代接統法の研究』明治書院  
 山田孝雄 1908 『日本文法論』宝文館  
 1913 『奈良朝文法史』宝文館  
 湯澤幸吉郎 1940 「接統助詞『ば』の用法」『国語学論考』八雲書林  
 渡辺 実 1974 『国語構文論』稿書房